

# RAFAŁ BLECHACZ

*Piano Recital Japan Tour 2021*



ラファウ・ブレハツチ

ピアノ・リサイタル 2021年 日本公演

**J.S.バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV 826**

J. S. Bach: Partita No.2 in C Minor BWV 826

- |                       |                       |                        |
|-----------------------|-----------------------|------------------------|
| 1. シンフォニア 1. Sinfonia | 2. アルマンド 2. Allemande | 3. クーラント 3. Courante   |
| 4. サラバンド 4. Sarabande | 5. ロンドー 5. Rondeaux   | 6. カプリッチョ 6. Capriccio |

**ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第5番 ハ短調 Op. 10-1**

L. v. Beethoven: Piano Sonata No.5 in C Minor Op. 10-1

- |                        |                                   |
|------------------------|-----------------------------------|
| 第1楽章 アレグロ・モルト・エ・コン・ブリオ | 1st mov. Allegro molto e con brio |
| 第2楽章 アダージョ・モルト         | 2nd mov. Adagio molto             |
| 第3楽章 フィナーレ：プレスティッシモ    | 3rd mov. Finale: Prestissimo      |

**ベートーヴェン：創作主題による32の変奏曲 ハ短調 WoO. 80**

L. v. Beethoven: 32 Variations on an Original Theme in C Minor, WoO. 80

\* \* \*

**フランク(バウアー編曲)：前奏曲、フーガと変奏曲 口短調 Op. 18**

C. Franck (Arr. Bauer): Prelude, Fugue and Variation in B Minor Op. 18

- |                   |                 |                     |
|-------------------|-----------------|---------------------|
| 1. 前奏曲 1. Prelude | 2. フーガ 2. Fugue | 3. 変奏曲 3. Variation |
|-------------------|-----------------|---------------------|

**ショパン：ピアノ・ソナタ 第3番 口短調 Op. 58**

F. Chopin: Piano Sonata No.3 in B Minor Op. 58

- |                        |                                  |
|------------------------|----------------------------------|
| 第1楽章 アレグロ・マエストoso      | 1st mov. Allegro maestoso        |
| 第2楽章 スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチェ | 2nd mov. Scherzo : Molto vivace  |
| 第3楽章 ラルゴ               | 3rd mov. Largo                   |
| 第4楽章 フィナーレ：プレスト・ノン・タント | 4th mov. Finale:Presto non tanto |

**【2021年 日本公演スケジュール】**

10月23日(土) 14:00開演 大阪 / ザ・シンフォニーホール Osaka / The Symphony Hall  
October 23 Sat. 14:00 主催: ABCテレビ / 協力: ザ・シンフォニーホール

10月24日(日) 14:00開演 東京 / サントリーホール Tokyo / Suntory Hall  
October 24 Sun. 14:00 主催: ジャパン・アーツ

10月26日(火) 19:00開演 川崎 / ミューザ川崎シンフォニーホール Kawasaki / Muza Kawasaki Symphony Hall  
October 26 Tue. 19:00 主催: 神奈川芸術協会 / 協力: ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ)

10月28日(木) 19:00開演 東京 / 東京オペラシティコンサートホール Tokyo / Tokyo Opera City Concert Hall  
October 28 Thu. 19:00 主催: ジャパン・アーツ / 共催: 公益財団法人 東京オペラシティ文化財団

10月30日(土) 14:00開演 名古屋 / 愛知県芸術劇場コンサートホール Nagoya / Aichi Prefectural Art Theater, Concert Hall  
October 30 Sat. 14:00 主催: 中京テレビ放送 / 企画・運営: 中京テレビ事業(第39回 名古屋クラシックフェスティバル)

10月31日(日) 13:30開演 札幌 / 札幌コンサートホール Sapporo / Sapporo Concert Hall Kitara  
October 31 Sun. 13:30 主催: オフィス・ワン



©Marco Borggreve

**ラファウ・ブレハッチ (ピアノ)**

Rafał Blechacz (Piano)

2005年、第15回ショパン国際コンクール優勝。マズルカ賞、ポロネーズ賞、コンツェルト賞、ソナタ賞(クリスチャン・ツイ梅ルマンにより創設)、オーディエンス賞と全てを同時受賞。同世代で最高のショパン弾きと称される。

彼のレパートリーはバッハ、モーツアルト、ベートーヴェン、リスト、ブラームス、ドビュッシー、シマノフスキと拡大を続け、その中からドイツ・グラモフォンより6枚のアルバムがリリースされた。この間の活動が高く評価され、2014年には、「ピアノのノーベル賞」とも称されるギルモア賞(アメリカ)を受賞。

1985年ポーランドのナクウォ・ナデ・ノテション生まれ。5歳からピアノを習い始め、ビドゴシチ市のルービンシュタイン音楽学校(ヤチェク・ボランスキ教授)を経て、ナワヴェジスキ音楽大学にてカタリーナ・ポポヴァ=ズイドロン教授に師事、2007年に卒業。在学中より、第13回ヨハン・セバスチャン・バッハ・ポーランド全国コンクール第1位およびグランプリ(1996年)、第5回A.ルービンシュタイン国際青少年ピアノコンクール第2位(2002年、ビドゴシチ)、第5回浜松国際ピアノコンクール第1位なしの第2位(2003年)など数々の賞を獲得。

ショパン国際ピアノコンクール優勝後は、ウィーン楽友協会、ベルリン・フィルハーモニー、コンセルトヘボウ、サル・プレイヤル、ロイヤル・フェスティバル・ホール、ミラノ・スカラ座など世界の名だたるホールで演奏活動を始め、ザルツブルク、ヴェルビエ、ルール・クラヴィア、ギルモアといった主要音楽祭にも招かれている。デュトワ、ゲルギエフ、ハーディング、P. ヤルヴィ、ルイジ、ナガノ、ネルソンス、ブレトニヨフ、ヴィット、ジンマンなど世界的な指揮者と共に演奏。

2006年よりドイツ・グラモフォンと専属契約。ポーランド人演奏家として、クリスチャン・ツイ梅ルマンに続く2人目となった。初のCD「ショパン:前奏曲集」でエコー・クラシック賞、ディアパソン・ドール賞を受賞。その後、2010年にはショパン生誕200年を記念してセムコフ指揮ロイヤル・コンセルトヘボウ管と録音したショパンのピアノ協奏曲1番、2番でドイツ・レコード批評家賞を受賞。「ドビュッシー／シマノフスキ」ではエコー・クラシック賞、グラモフォン誌月間ベスト・アルバム、2013年クラシック音楽の最優秀録音としてフレデリック賞(ポーランド)を授与された。2013年の「ショパン:ポロネーズ集」は発売と同時にゴールド・レコードに輝き、再びドイツ批評家賞を獲得。2017年にはJ.S.バッハの作品集がリリース、2019年1月にはヴァイオリンのキム・ボムソリと共に室内楽の作品集がリリースされ話題となった。

批評家たちからはこれらの芸術的功績を讃えてキジアナ音楽院国際賞(イタリア)を2010年に贈られる。2015年、ポーランド共和国大統領メダルであるポーランド復興勳章カヴァレルスキ十字勳章を授与された。

## J.S.バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV 826

舞曲の性格を持つ同じ調の曲を組み合わせた「組曲」は、バロック時代の重要な器楽曲の形式であり、大作曲家ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685～1750)の「パルティータ」も、その伝統を受け継いでいる。しかし、舞曲の配列には自由な扱いが見られ、さらに、組曲を構成する舞曲が本来の性格から離れる傾向も見せている。今回演奏される第2番は、全6曲から成り、終曲として「ジーゲ」の代わりに「カプリッチョ」が採用されている点などが、特徴的である。

「シンフォニア」：「シンフォニア」は元来、イタリア・オペラの序曲を意味するが、この曲は、「フランス風序曲」のように大規模な構成になっている。重厚な序奏で壮大に始まり、ゆるやかな中間部を経て、フーガで締めくられる。

「アルマンド」：穏やかな曲調で、歌謡的な旋律が奏でられる。

「クーラント」：「フランス型」のクーラント、つまり、拍子が4分の6拍子と2分の3拍子の間を交替して、アクセントの位置が変わるのが特徴的なクーラントである。

「サラバンド」：サラバンドでは本来、第2拍にアクセントがあるが、この曲では、その固有のリズムが見られず、流麗な動きで進む。

「ロンドー」：ロンドーとは17世紀フランスで発展した舞曲であり、対をなす2つの楽想が交替する軽快で活発な曲である。

「カプリッチョ」：フーガ風の書法によりながら、自由な展開を見せる。

## ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ 第5番 ハ短調 Op. 10-1

ドイツのボンに生まれ、ウィーンで世を去ったルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770～1827)のピアノ曲のなかで、作品番号のついたソナタは32曲残されている。Op.10としてある3曲のうち、1795～97年の作と推定されているOp.10-1は、3楽章の簡潔なまとまりのなかに、緊張感を含んだ力強さを印象づけるソナタである。なお、「第4番」Op.7までの4曲のソナタを4楽章制で書いていた彼が、「第5番」Op.10-1において、3楽章制を基準とする構成に立ち返ったことは興味深い。

**第1楽章** アレグロ・モルト・エ・コン・ブリオ。ハ短調、ソナタ形式。きびきびとして決然たる性格の第1主題と、流麗な美しさを持つ第2主題を中心に展開する。

**第2楽章** アダージョ・モルト。変イ長調、展開部を欠くソナタ形式。簡素ななかに深い詩情を湛えた2つの主題が、美しく変奏されてゆく。

**第3楽章** フィナーレ：プレステイシモ。ハ短調、ソナタ形式。短いながらも巧妙な構成が目をひくフィナーレ。緊張感に富む第1主題と、穏やかな表情を持つ第2主題は、共に、休止符が効果的に置かれた書法に特色がある。

## ベートーヴェン：創作主題による32の変奏曲 ハ短調 WoO. 80

ベートーヴェンは、ソナタのほかにも数多くの名作を、ピアノのために作曲した。なかでも変奏曲は、特に注目されるジャンルであり、彼は、ロマン派の時代に活躍したブラームスと並んで、このジャンルに傑出した手腕を見せた作曲家に数えられる。

1806年に作曲された「創作主題による32の変奏曲」は、「ディアベリ変奏曲」などの大作と比べれば小規模だが、音楽的な内容は充実しており、ピアノによる性格的変奏の多様な可能性が、コンパクトに集約されていると言えよう。ハ短調、アレグレットの、ベートーヴェンのオリジナルによる8小節の短い主題のあとに、全部で32の変奏が切れ目なく続く構成で書かれている。

## フランク(バウアー編曲)：前奏曲、フーガと変奏曲 口短調 Op. 18

ベルギーに生まれ、パリに学び、鍵盤楽器を最も重要な表現手段としたセザール・フランク(1822～1890)は、1858年に、念願だった聖クロテイルド教会のオルガニストに任命された。その教会には、カヴァイエ・コルという名工の製作した新式の大オルガンが設置されたばかりであり、フランクは、演奏の腕を磨ぐと同時に、オルガン曲の作曲に意欲的に取り組んだ。そこで生まれたのが、1862年に発表された「6つの作品集」Op.16～21である。その第3曲としてある「前奏曲、フーガと変奏曲」Op.18は、作曲家のC.サン＝サーンスに献呈された。フランク自身による編曲もあるが、今回は、イギリス出身のピアニスト、ハロルド・バウアー(1873～1951)によるピアノ編曲版で演奏される。

**前奏曲** アンダンティーノ・カンターピレ。牧歌的な曲想が印象に残る前奏曲。

**フーガ** 堂々たる序奏の後、アレグロ・マ・ノン・トロッポによる4声のフーガとなる。

**変奏曲** アンダンティーノ。「前奏曲」の部分が再現し、変奏され、最後は口長調で静かに終わる。

## ショパン：ピアノ・ソナタ 第3番 口短調 Op. 58

ポーランド出身の作曲家、フレデリック・ショパン(1810～1849)の作品は、大半がピアノ曲であり、その天才的な創作力によって、数々の名作が生み出された。ピアノ・ソナタについては、3曲が残されている。1844年に作曲され、E.ドゥ・ペルトイ伯爵夫人に献呈された第3番は、4楽章から成る。各楽章に、ショパンならではの洗練された美しい楽想が盛り込まれ、さらに、1曲のソナタとしての統一性や、スケールの大きさも注目される作品である。

**第1楽章** アレグロ・マエストーロ。口短調、ソナタ形式。重厚な第1主題と、優美な第2主題を中心に行進する。

**第2楽章** スケルツォ：モルト・ヴィヴァーチエ。変ホ長調、3部形式。主部では軽快な動きが続くが、中間部では口長調に転じ、コラール風の静穏な曲想に落ち着く。そして再び主部となり、切れ目なく第3楽章に続く。

**第3楽章** ラルゴ。口長調、3部形式。詩情を湛えた主部と、転調を重ねてたゆたうような美しさが紡ぎ出される中間部は、共に、ショパンらしい夢想的な世界を作り出す。

**第4楽章** フィナーレ：プレスト・マ・ノン・タント。口短調、ロンド形式。明快かつ力強い流れを保つか、豊かな楽想に彩られたフィナーレ。劇的な高まりと共に、ソナタ全曲を堂々と締めくくる。